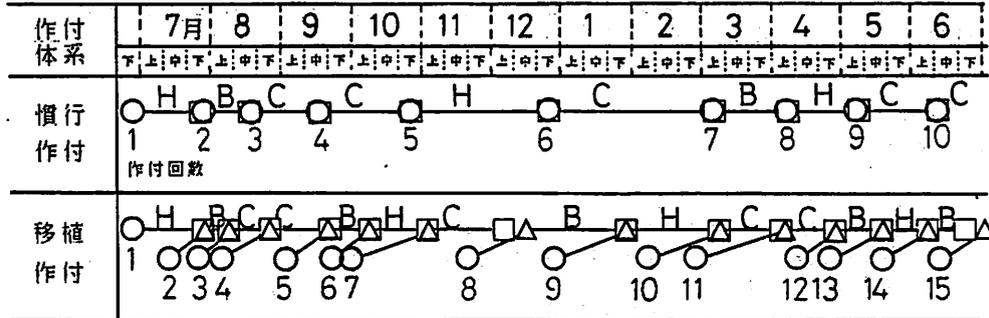


課題名	12 九州北部水田野菜地帯における地域輪作方式の確立 (2)セル成型苗利用による野菜の作付体系の改善	分類	①
試験研究年次	63~2年(完了)		
I 目的			
セル成型苗を利用して育苗を分業化することにより、効率的な野菜の作付体系や輪作体系の改善を図り、水田地帯における野菜生産の定着化に資する。			
II 試験方法			
1 現地実態調査			
(1) 調査対象地域 三井郡北野町、大刀洗町			
(2) 調査方法 対象地域の農業概要及び作目や作付体系について、北野町は、62戸、大刀洗町は、38戸、アンケート調査を行った。			
2 セル成型苗の利用による作付体系の改善			
試験 I 育苗日数と苗の形質			
供試品目：キャベツ、ハクサイ、リーフレタス、チンゲンサイ、べんり菜			
試験 II 品目毎の適応性と作付回数			
供試品目：チンゲンサイ、ハウレンソウ、べんり菜			
試験 III 輪作体系の改善			
供試品目：チンゲンサイ、ハウレンソウ、べんり菜			
III 主要成果の概要			
セル成型苗は径が数cmの鉢型の容器を、水稻の育苗箱の大きさに連結して成型したトレイの中で育成した苗である。野菜の栽培は、このセル成型苗を利用することにより、均一な健苗の導入が可能になる。また、水稻や前作野菜との労力競合を回避して効率的な輪作体系が成立し、分業化方式を取り入れた計画的な野菜生産が可能となる。			
1 現地の実態は、育苗、定植時や収穫時の労力が不足し、また、野菜の作付も多い所で年間3作であり、作付体系が膠着化している。			
2 セル成型苗は、水稻用育苗箱で100~400本の育苗が可能であり、軽量化による労働強度の軽減と効率的な大量育苗が可能になる。			
3 育苗日数は、セル数が200トレイでは20日前後であり、共同育苗施設における稼働率を高めて、継続的な種苗供給が行える。			
4 輪作体系は、セル成型苗を利用して育苗を分業化することにより、1年間の作付回数が増加して多様化する。また、野菜作に不慣れである農家の取り組みも容易になる。			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 セル成型苗とポリポットの用土量

育苗容器	セルの大きさ	1トレイセル数	1トレイ及び1ポット当たりの用土量	苗1本当たりのポリポット対比用土量
セル大	2.6×3.5cm	162コ	1.416g	0.15
セル小	2.2×3.5cm	200コ	1.184g	0.10
ポリポット	直径6cm	...	60g	1.00



○--播種 △--定植 □--収穫

注) H: ホウレンソウ B: べんり菜 C: チンゲンサイ

第1図 セル成型苗利用による輪作体系

第3表 セル成型苗利用による年間作付回数と収量

品目	セル成型苗移植作付体系				慣行播種作付体系		
	作付回数	育苗日数	在圃日数	収量	作付回数	在圃日数	収量
べんり菜	15.7	17.4	22.5	15.6	11.0	33.0	11.2
チンゲンサイ	12.3	22.6	28.7	18.1	8.2	43.0	12.4
シュンク	10.5	28.9	33.9	9.1	7.0	51.0	5.5
ホウレンソウ	9.5	21.3	33.3	12.1	8.0	42.6	9.2
苣苔	7.3	32.0	49.0	8.4	5.7	64.4	6.9

注) 育苗日数と在圃日数は1作毎の平均日数とした。

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 就農者の高齢化や労働力不足に対応した、野菜栽培方式として活用する。
- 2 共同育苗施設の設置による地域に密着した種苗の安定的な供給体制を確立する必要がある。
- 3 セル成型苗は、従来の苗に比べ小苗であるので、定植後活着まで、しおれさせないように灌水管理に注意する。

VI 今後の研究上の問題点

- 1 セル成型苗の短期保存方法の確立
- 2 セル成型苗の機械移植栽培技術の確立

VII 資料名

- 1 九州農業研究 第52、53号
- 2 福岡県農業総合試験場研究報告 B 第10号